

リハビリテーション科ニュース

発行所・発行人
小諸厚生総合病院
リハビリテーション科
E-mail
K-reha@ma.ctk23.ne.jp
10.03.01発行



現在のリハビリテーション科の設立に尽力された、花岡さんと山口さんが今年度で退職される事となりました。今回は、そのお二人にお話をお聞きしました。



理学療法士
花岡 利安さん

Q1 1979年にこの病院の理学療法士に着任し、今まで取り組んできたことは?

その頃ちょうど急速に高齢化の波が押し寄せ、生活習慣病(当時の成人病)の増加により、脳卒中などで障害を抱えたまま暮らしていかねばならない方が増えてきていました。救急医療の進歩に比べてリハビリテーション医療や介護・福祉分野の整備は大きく立ち遅れ、いわゆる寝たきりの人が急増したのです。「リハビリテーションの病理学はフォローアップ!」という言葉を感じ、在宅ケアの取り組みを開始しました。最初は、自治体の保健師さんと子供や老人をどう診ていくかの相談を行い、訪問指導から開始し、閉じこもり気味の方に対し、自治体と協力してリハ教室を開始していききました。その後、老人保健法が制定され、1987年全国に先駆けて病院内にデイケアセンターこまくさを設立し、ボランティア教室、在宅介護支援センターを設

することに取り組んできました。

Q2 現在のリハビリテーション科を作り上げていく為にどのような活動をされましたか?

最初は、とにかくリハビリテーションとはどういうものかを他の人に理解してもらおうために一生懸命取り組みました。病棟とのミーティングを行い、リハの哲学を他部門へ広めようと働きかけました。地域では市町村とのミーティングを行ったり、看護学校への講義に行ったりもしましたし、学会発表も積極的にいき、小諸での取り組みを紹介してきました。

Q3 メッセージ

前歴踏襲ではなく、常に目先を変えて新しい事に向かって活動してください。また、地域社会での活動を積極的に行ってください。病院の中だけで完結するのではなく、仕事の他に何か一つでも打ち込める物を作り、社会の中で活動できるように、それぞれが考えて、参加して欲しいと思います。

Q1 入職当時と現在を比べて変わった事は?

当院に入った頃から今までに医療が大きく変わったと思います。私が病院に入ったころ



健康運動指導士・
ケアマネジャー
山口 和久さん
市立病院に理学療法士がいない時代、リハビリテ

シオン科は整形の付属というかたちで独立してませんでした。その5年後、花岡さんが当院にきてから徐々にリハビリテーション科のスタッフも増え、現在では、地域ケアでは小諸が一番という程大きくなりました。病院もスタッフ120人程度の小さい病院だったのですが、スタッフ同士の関係が密で、アットホームな雰囲気でした。今は病院が大きくなり、仕事で関わる人以外との接点を持ちにくくなったような気がします。その分組合活動など横の繋がりをもち、お互いの仕事を理解していく必要があると思います。

Q2 今までに一番印象に残っていることは?

デイケアをリハ科中心に立ち上げたときは、みんなが前向きに一丸となって取り組んだことです。この時リハ科はパワーがある職場だと思えました。また、こまくさ設立の時に、こまくさの歌を1週間で作詞・作曲するように頼まれ、構想もないまま引き受けたこともありました。特に2番の作詞に苦労しましたが、良い歌が作れたと思っています。

Q3 メッセージ

高齢化が進み、これから益々障害を抱えながら生きていく人たちが多くなってくると思えます。その時その人たちに、しっかり対応できる医療・福祉を確立していかなければなりません。自分の仕事だけでなく医療・保健・福祉トータルにこの地域で、病院が果たす役割を考えていって欲しいと思います。

編集後記

リハビリテーション科を作り、支えていただいたお二人です。長い間お疲れ様でした。皆さんにも、今後のリハ科の成長を暖かく見守っていただければと思います。
(広報担当)